

包天笑の翻訳小説『赤死病』について

白 須 留 美

〔抄 録〕

中国において清末民初は西洋文化・小説などの文献翻訳の需要が高まった時期であり、多くの翻訳家が登場した。その一人に包天笑（1876～1973）があげられる。包天笑は、1916年の『春聲』第三集に呉門天笑生の筆名で翻訳小説『赤死病』を発表している。この翻訳小説は原著及び原著者について不明記ながら、ポオの“The Masque of the Red Death”を原作とする。ただしポオ原作からの翻訳ではなく日本語訳からの重訳と考え、1916年以前の日本での“The Masque of the Red Death”の翻訳文献を調べた所、本間久四郎訳『赤死病の仮面』（1907）と谷崎精二訳『赤き死の仮面』の二点が該当した。本稿では、包訳・本間訳・谷崎訳・ポオ原作の段落構成の検証と包訳・本間訳・谷崎訳の三文献の本文の検証から包訳の底本となる文献を調査したところ、包訳は谷崎訳を重訳した可能性が高いことが明らかになった。

キーワード 包天笑 赤死病の仮面 民初のポオ翻訳 谷崎精二 本間久四郎

1 はじめに

中国において清末民初は西洋文化・小説などの文献翻訳の需要が高まった時期であり、多くの翻訳家が登場した。その一人に包天笑がいる。包天笑は1876年（～1973年）に蘇州に生まれ、本名は包清柱（後に公毅に改める）、字は朗孫。包天笑は彼のペンネームの一つであり、他に笑生、呉門天笑生、釧影楼主、秋星閣などがある。19歳の時に秀才に合格する。23歳ごろに日本語、英語、フランス語を学ぶがどれも上達することなく挫折するものの、日本語のみ独学で学習を続けたとある⁽¹⁾。独学で学習を続けた包天笑の翻訳能力に疑問を呈する点があるものの、彼の翻訳活動は、科学小説、児童小説、探偵小説など多岐に亘っている。また多くの雑誌や新聞の編集者を務めると同時に自らの作品を多数掲載した。包天笑の翻訳した小説には原著者が不明な作品が少なくない。原著者が記載されているものとしては、迦爾威尼（ジュール・ヴェルヌ）、囂俄（ヴィクトル・ユゴー）、亨利荷特（ヘレン・ウッド）、祁赫夫（又は奇霍夫、チャーホフ）、託爾斯泰（トルストイ）などがある。

包天笑は語学の学習を途中で挫折していると自ら述べながらも、その翻訳作品を見るとフラ

ンス、イギリス、ロシアなどと多岐に亘っている。明らかに包天笑個人の能力では翻訳が不可能であり、これらは独学を続けたとある日本語の翻訳作品を中国語に重訳したものであると考えるべきであろう。

『赤死病』⁽²⁾は呉門天笑生の筆名で『春聲』⁽³⁾第三集（1916年4月）に掲載された包天笑の翻訳作品である。『春聲』第三集の目次、本文共に原著者についての記載は見られず、『清末民初小説目録』では著者不詳となっている。また包天笑の回想録『鉤影樓回憶錄』⁽⁴⁾に『赤死病』についての記載はみられなかった。包天笑の翻訳作品には、包が単独で翻訳した作品と共同で翻訳した作品の二種類がある。共訳で掲載した作品には、共訳者の名が記されていることから、本稿では包天笑のみ名が記載されている作品は本人が翻訳したものとして考える。すなわち『赤死病』は包による翻訳として検証を行う。包天笑の重訳作品の詳細については、樽本氏の『清末民初小説目録 第6版』⁽⁵⁾を参考とした。

今回、作品を調査したところエドガー・アラン・ポオの“The Masque of the Red Death”（邦題『赤死病の仮面』）の翻訳作品であることが確認できた。中国におけるポオ研究の論文「近代中国的愛倫・坡小説漢訳史研究」⁽⁶⁾では、1928年に『現代文学』に掲載された林微音（1899～1982）『紅死的面具』が“The Masque of the Red Death”の最も古い翻訳としており、包天笑の『赤死病』については触れられていない⁽⁷⁾。

包天笑の翻訳作品は日本語から重訳した可能性があるため、『赤死病』にも日本語の原本があるはずだと考え、『赤死病』が掲載された1916年以前に、日本で発表された“The Masque of the Red Death”の翻訳作品を見たところ該当する文献は以下の2点であった。

- ① 本間久四郎訳『赤死病の仮面』（『名著新譯』文禄堂書店、明治四十（1907）年11月）
- ② 谷崎精二訳『赤き死の仮面』（『赤き死の仮面』泰平館書店、大正二（1913）年7月）

本稿では、本間訳と谷崎訳、包訳を比較して包訳がどの文献から重訳を行ったのかを検証する。

2 『赤死病』の表題について

包天笑の表題『赤死病』について見る前に、まずポオの表題を見ていきたい。“The Masque of the Red Death”は1842年5月号の“Graham's Magazine”（以下、[Graham's]）に初めて発表されている。その時の表題は“The Mask of the Red Death”⁽⁸⁾だったが、1845年6月19日の“Broadway Journal”（以下、[Broadway]）に再度発表されたときには“The Masque of the Red Death”⁽⁹⁾に改題されている。以降、標準的な表題は“The Masque of the Red Death”である。

次いで現在日本での表題を見ると、ポオの翻訳を出版している創元推理文庫、岩波書店は共

に『赤死病の仮面』と題され、筑摩書房から出版されている『世界文学全集 (26)』(1968年)にも『赤死病の仮面』で所収されている。“The Masque of the Red Death”の‘masque’は「仮装舞踏会」の意から、日本語の表題は『赤死病の仮装舞踏会/仮面舞踏会』となっておかしい。しかし『赤死病の仮面』が一般的な表題となっている。

中国においての表題を見ると、林徽音(1899～1982)は『紅死的面具』(『現代小説』第5期、1928年)で発表し、この翌年に銭歌川(1903～1990)は『紅死的假面』(『文學週報』第八卷、1929年)で発表している。中国では、林訳、銭訳の表題の他、『“紅死病”的假面舞会』⁽¹⁰⁾『紅死病的化装舞会』⁽¹¹⁾との表題が見られる時期もあったが、今では『紅死魔面具』⁽¹²⁾『紅死病的假面具』⁽¹³⁾など表題に「面具」「仮面」が使われるのが一般的である。

表題について議論する前提として、まず本間訳と谷崎訳の定本が[Graham's][Broadway]どちらの系統であったのかを明らかにしておく。

文献“The Complete Works of Edgar Allan Poe” Volume4⁽¹⁴⁾による[Graham's][Broadway]の異文情報では、句読、綴りなどの異同を別にして翻訳に関係するような、大きな変更点は以下の六つである。これらに対応する本間訳、谷崎訳の部分を検討する。異文の場所は谷崎訳の段落で示す。段落の対応については<表1>をご参照頂きたい。

[1] 谷崎訳、第5段落 「樂人も居た。美人もあり」

[Broadway]では‘there were musicians, there was Beauty,’であり、[Graham's]では両句の間に‘there were cards,’が入る。谷崎訳ではこれに相当する句はない。また、本間訳第4段落では「音楽者も藝者も、」とあり、同じくこれに相当する句はなかった。

[2] 谷崎訳、第7段落 「其の舞踏會は實に浮き立つ様なきらびやかなものだつた。」

[Broadway]ではこの文‘It was a voluptuous scene, that masquerade.’は、第4段落の先頭にあるが、[Graham's]では第3段落の最後に位置する。谷崎訳では先頭にあり、本間訳第6段落でも先頭に「さてこの假面舞踏會こそ最も淫慾的しいものであったので、」とある。

[3] 谷崎訳、第18段落 「假面者にそれぐの役割を與へた」

[Broadway]では‘which had given character to the masqueraders.’であるが、[Graham's]では‘the masqueraders’の箇所を‘the costumes of the masqueraders’とする。谷崎訳にも、本間訳第10段落にも“the costumes of”に対応する句がなかった。

[4] 谷崎訳、第22段落 「到頭眞夜中を知らせる時計の音が鳴り始めた」

[Broadway]では‘until at length there commenced the sounding of midnight upon the

clock’で、[Graham’s] では ‘until at length was sounded the twelfth hour upon the clock’ とある。本間訳のこの部分は [Graham’s] に対応するようにみえるが、原作には続いて「時計が12回鐘を打つ」という部分があり、本間訳では省略されている。即ち本間訳は二つの部分を合わせた意識と考えられる。

[5] 谷崎訳、第27段落 「傍に立つた侍臣に」

[Broadway] では ‘the courtiers who stood near him’、[Graham’s] では ‘the group that stood around him’ とある。本間訳第15段落では「傍なる近侍の者を」とあり、谷崎訳も本間訳も [Broadway] に対応する。

[6] 谷崎訳、第27段落後

[Broadway] の第11段落の後に、[Graham’s] では ‘— Will no one stir at my bidding? — stop him and strip him, I say, of these reddened vestiges of sacrilege!’ とあるが、谷崎訳も本間訳もこの部分はなかった。

以上より本間訳、谷崎訳の定本は [Broadway] 系統であることが分かる。すなわち表題に ‘Masque’ に対応する句を含んでいても良いことがわかる。これを「仮面」としているのは、訳者による解釈であるか、それとも当時の ‘Masque’ という語の流通による影響が考えられるであろうか。井上晴彦氏の『暗黒の世界—「赤死病の仮装舞踏会」研究—』⁽¹⁵⁾を見ると、「この物語の舞台は仮装舞踏会であり、‘masque’ がその意味であれば ‘mask’ も元来同じ意味であったとも考えられる。……何れにせよポオは「仮面」を避けた訳である。「仮面」にどのような不都合があったのであろうか、『赤死病の仮装舞踏会』と『赤死病の仮面』との間に若し本質的な差異があるとすれば、それは暗示性の有無ではなかろうか。」とあり、ポオが象徴性を重視したための表題の変更が考えられる。

包天笑が重訳したと考えられる本間訳、谷崎訳の表題は『赤死病の仮面』と『赤き死の仮面』であり、表題だけを見ると本間訳『赤死病の仮面』からつけたように思われる。しかし本間訳は1907年に出版されている。包訳の『赤死病』が掲載されたのは1916年である。谷崎訳は1913年に出版されていて、包訳に時期は近い。どちらか一冊ではなく、2冊とも見た可能性もあり、表題だけでは本間訳、谷崎訳のどちらを重訳したかは見分けられない。また別の翻訳の可能性も考えられる。この問題については、後で詳しく検証していくこととする。

3 『赤死病』の明治、大正の邦訳について

『赤死病』の明治、大正の邦訳について、まずは日本でのポオの翻訳史について見ておきたい。宮永孝氏の『点描 ポーの日本伝来考』⁽¹⁶⁾には、明治20年代になるとポオの短篇の翻訳が

見られるようになる」とある。明治20 (1887) 年、饗庭篁村が『読売新聞』に翻案小説『黒猫』 (“The Black Cat”)、『ルーモルグの人殺し』 (“The Murders in the Rue Morgue”『モルグ街の殺人』)、『めがね』 (“The Spectacles”『眼鏡』) を連載したのを皮切りに、明治26 (1893) 年に内田魯庵が日本初の正訳『黒猫』を翻訳し、明治29 (1896) 年に森田思軒が『秘密書類』 (“The Purloined Letter”『盗まれた手紙』)、『間一髪』 (“The Pit and the Pendulum”『陥穽と振り子』) を発表している。まだこの時期に “The Masque of the Red Death” の翻訳は見られない。宮永氏によると明治30年代から明治末年にかけて多くの文学者がポオの評論、翻訳をさかんに文芸雑誌に発表したとあり、「ポーが翻訳されたのは、主として明治二十年代からであるが、かれが断続的にせよたびたび訳されたのは、時代の嗜好や傾向、何より紹介者の好みにもよるであろうが、ポーの作品がもつ特異性や紹介するのに手頃な長さであったことも考慮されねばならぬであろう。ポーの作品が翻訳紹介されるのと相俟って批評が行われるようになったことも事実だが、まだ本格的な翻訳の開始には程遠かった。」⁽¹⁷⁾とある。

そしてこのような時期である明治40 (1907) 年に “The Masque of the Red Death” の翻訳が、本間久四郎訳『名著新譯』に『赤死病の假面』の表題で登場する。この『名著新譯』には、夏目漱石、上田敏、島村抱月の三名の序が載せられている。著名な文学者の序が載せられたにもかかわらず、いまのところ筆者は訳者の本間久四郎について詳細がわかっていない。筆者が知りうるところでは、本間久四郎は、本間久、夜香郎、天馬樓主人などの名で『快漢ホルムス第一編 (黄金の顔)』(コナン・ドイル著、夜香郎訳、笑変窟出版、1906年)、『黄金虫』(ポオ著、本間久四郎訳、文禄堂、1908年)、『月世界旅行記』(天馬樓主人訳、文禄堂、1908年)、『アラビヤナイト全訳』(本間久訳、東亞堂書房、1913年) など多数の翻訳小説を発表している翻訳家ということだけである。さて『名著新譯』では、ポオの作品は『黒猫物語』『陥穽と振り子』『赤死病の假面』の三篇が収録されている。

大正に入ると、「大正時代全般の社会的風潮として、自由主義や個人主義的気分がみなぎっていたせいか、何よりも第一次世界大戦後の民主的傾向の強い市民社会に強い刺戟となるような斬新な文学を紹介しようといった意図から出たものか、ポーの作品がしきりに翻訳紹介された。」⁽¹⁸⁾、そしてポオ単独での本が刊行されるようになる。大正の初め頃に刊行されたものの一つが谷崎精二訳『赤き死の假面』(泰平館書店、大正二 (1913) 年7月) である。『赤き死の假面』には、『赤き死の假面』『ウィリアム、ウイルソン』『アッシャー館の滅落』など13作品が載せられている。谷崎精二 (1890～1971) は、英文学者、作家にして、谷崎潤一郎の弟である。兄である谷崎潤一郎の影響もあって文学を志す。1909年に早稲田大学高等予科英文科に入学し、坪内逍遙、島村抱月らの指導を受けた。1941年には『ポオ小説全集』全6巻 (春陽堂) を出版する。『赤き死の假面』は、谷崎が早稲田の学生時代に初めてポオの短篇集を翻訳して出版した作品である⁽¹⁹⁾。

明治、大正と異なる時期のポオの翻訳と、包訳の『赤死病』の比較検証を次節以降で行って

いくこととする。

4 段落構成の検証

包訳、本間訳、谷崎訳、ポオ原作の段落構成から、包訳が三文献のいずれの段落に沿っているのかを見ていく。段落構成を検証することで包が底本とした文献を立証することに繋がると考える。谷崎訳においてはポオ原作の逐語訳であるからして、文の意味によっておおかた文単位で対応することが可能である。これを可能にしているのは、『赤き死の假面』『ポオの作品に就きて』にあるように、ポオの「美の韻律的建設」を重視して、谷崎が翻訳に際しても原著の句読までも再現しようと努めたことによる。

茲に收めたポオの短篇は皆彼の生前二三度版を改めて世に出たものであるが、新しく出版さるゝ度にポオは細かい部分々々を訂正し、殊に句讀の切り方の相違は無數あつたと云う。ポオは詩を「美の韻律的建設」と云ひ乍らも後にはその韻律と云ふ制限に不自由を感じて、竟に詩から散文へ移った人であるが、内部生命の呼吸から自發的に現れる一種の内容律だけは何處迄も無視する事が出来なかつたと見える。改版する度に彼が句讀を切り替へねば氣がすまなかつたと云う事は、彼が一種の内容律を重んじた事を明かに證明して居るものではあるまいか。（中略）

譯者は此の譯を出來得べくんば一言一句、句讀の切り方迄原著の通りにしたいと努めたが、彼我言語文脈の相違が到底此の企てを許してくれなかつた。斯く迄自己の言葉を熱愛した原著者に對して譯者は恥づる處が多い。[谷崎1913、P5～7]

谷崎訳は四文献の内、段落分けが一番細かく、また上述の原著への忠実性より、谷崎訳を段落分けの比較の中心に据えることができる。すなわち谷崎訳の段落を基準に包訳、本間訳の段落の対応を決める。一部、本間訳が谷崎訳より細かい段落があるが、その部分（本間訳3、4段落）では本間訳を基準とする。

<表1：ポオ・本間・谷崎・包の段落構成の対応表>

ポオ	1	2					3	4							5			6
本間	1	2	3	4			5	6 ⁽²⁰⁾	7						8			9
谷崎	1	2	3		4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
包	1	2			3 ⁽²¹⁾		4		5			6			7		8	

ポオ	7				8		9		10	11	12	13				14		—
本間	10	11 ⁽²²⁾			12		13		14	15	16	17				18	19	—
谷崎	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	—
包	9		10				11				12				13			14

段落の対応について考察するために、「段落構造の相違」を以下のように考える。

- (1) ある段落の一部のみを含む段落がある場合、段落構造が異なると言う。
- (2) 一つの段落を分割している場合は段落構造が異なるとは言わない。
- (3) 複数の段落を纏めただけの場合は段落構造が異なるとは言わない。

段落の一部のみを他（前或いは次）の段落と統合する積極的な意味がある場合を除いて、この「段落構造の相違」に注目することで、翻訳文献相互の関係を概略的に捉える事ができるだろう。例えば、以下に示すように谷崎訳の第3段落最後の下線部だけは、包訳では次の段落に移されている。包天笑がこの文を次の段落の補足になっていると、解釈したための措置と考えられる。

<例>

谷崎訳、第3段落

其の僧院は廣い、宏壯な構造で、公自身の風變りな然も壯嚴な趣味から造り出されたものであつた。丈夫な、高い壁がその周圍を取巻いて、その壁には鐵の扉がついて居た。家來達は中へ這入つてから鎔鐵爐と大きい鐵槌を運んで來て門を焼ちつけてはうと決心したのである。但し僧院には食物は充分備へてあつた。〔谷崎1913、P4〕

包訳、第4段落の冒頭

但此院中，種種之設備，俱極完全，而第一卽此食物，大足供數年之需。〔包1916、P1〕

<表1：ポオ・本間・谷崎・包の段落構成の対応表>より段落構造の相違に関して、以下のことが言える。

- (a) 谷崎訳はポオ原作の段落を分割しているだけなので、「段落構造の相違」(2)よりポオ原作と谷崎訳に段落構造の相違とは看做さない。
- (b) 本間訳はポオ原作の段落を分割しているだけなので、「段落構造の相違」(2)よりポオ原作と本間訳に段落構造の相違とは看做さない。
- (c) 包訳は谷崎訳の段落を纏めただけなので、「段落構造の相違」(3)より谷崎訳と包訳に段落構造の相違とは看做さない。

- (d) 包訳はポオ原作と段落構造に相違があると看做す。例えば、包訳の第4段落はポオ原作の第3段落と第4段落の一部を含んでいる。ポオ原作との段落構成の相違として他に次の4か所がある。包訳の第8段落はポオ原作の第5段落の一部と第6段落を含み、包訳の第10段落はポオ原作の第7段落の一部と第8段落を含み、包訳の第12段落はポオ原作の第12段落と第13段落の一部を含み、包訳の第13段落はポオ原作の第13段落の一部と第14段落を含む。
- (e) 包訳と本間訳の段落構造の間には、次の相違がある。本間訳の第4段落は包訳の第2段落の一部と第3段落を含み、本間訳の第8段落は包訳の第7段落と第8段落の一部を含み、第11段落は包訳の第9段落の一部と第10段落の一部を含む。包訳の第8段落は本間訳の第8段落の一部と第9段落を含み、包訳の第9段落は本間訳の第10段落と第11段落の一部を含み、包訳の第10段落は本間訳の第11段落の一部と第12段落を含む。

これら段落どうしの関係から予想できることは、本間訳、谷崎訳はポオ原作からの翻訳であるが、包訳はポオ原作からの翻訳ではない。包訳はポオ原作の段落構成ではなく、谷崎訳の段落構成を纏めている。そして本間訳の段落構成を参照していないことから、本間訳からの重訳ではないと言える⁽²³⁾。加えて谷崎の言うポオの韻律的な美学については、包天笑に継承されなかったことになる。続いて本文からの検討によって、包訳が谷崎訳を重訳したという予想を根拠づけることにする。

5 本文からの検証

前節の段落構成の検証により包訳は谷崎訳からの重訳である可能性が強まった。次いで本項では本間訳、谷崎訳、包訳の三文献の本文検証を行い、包訳が本間訳と谷崎訳のどちらを重訳したのかについて検討していく。三文献の検証を行う前に本間訳と谷崎訳の翻訳の特徴について見ておきたい。

5-1 本間訳の特徴

本間訳の特徴としては、ポオ原作の誤訳、意識、削除が見られる。例えば、① ‘It was toward the close of the fifth or sixth month of his seclusion,…….’⁽²⁴⁾ を「かくて年を超え月を重ね、こゝに移られてから早や十五六ヶ月になつた。」[本間1907、P2] と原作の「5, 6 カ月」を「十五六ヶ月」とする誤訳や② ‘The apartments were so irregularly disposed that the vision embraced but little more than one at a time.’⁽²⁵⁾ の箇所を「室々は不規則になつてゐるので、舞踏中に互に二度としも抱き合へる程であつた。」[本間1907、P3] とする誤訳が見られた。②の誤訳はおそらく ‘embraced’ を「含む、包含する」ではなく「抱擁」と取り間違えたため

によるものと思われる。本間訳にはこうした誤訳が複数みられる。誤訳として示した上記の2か所に該当する包訳は本間訳ではなく谷崎訳と同内容である。

また意識の例としては各部屋の描写箇所において、ポオ原作では事細かに各部屋が書かれているのに対して、本間は簡潔にまとめており、加えて4部屋目の描写が抜けている⁽²⁶⁾。また仮装舞踏会での仮装者の描写部分も意識されている⁽²⁷⁾。削除箇所については、大きく描写が削除されている箇所は<表3>より逐語訳をおこなっている谷崎訳と比べて13か所ある。その他、細かい部分の削除についてはさらに増える。

これらの点から見るに、逐語訳をおこなった谷崎訳とは大きく異なり、本間訳はポオの原作を意識した作品である。そして本間の誤訳、意識、削除の箇所は包訳との内容の異なりが見られる。

5-2 谷崎訳の特徴

谷崎訳の特徴は、ポオ原作を逐語訳した点である。谷崎が逐語訳に務めた点については、節4「段落構成の検証」で示した『赤き死の仮面』『ポオの作品に就きて』から見てとれる。谷崎訳の翻訳は、創元推理文庫『ポオ小説全集3』及び岩波文庫『黄金虫・アッシャー家の崩壊』にそれぞれ収録されている「赤死病の仮面」の翻訳と大差ないものであった。また誤訳、意識、削除の箇所は筆者が見る限りではなかった。段落構成については、節4「段落構成の検証」の<表1：ポオ・本間・谷崎・包の段落構成の対応表>で示すように、谷崎訳はポオ原作の段落を分割しているだけである。つまり谷崎訳「赤き死の仮面」は、段落構成を除いてポオ原作にほぼ沿った翻訳だと言える。本間、谷崎の訳の特徴をとらえた上で、次項より包訳と比較検証を行っていく。

5-3 言葉「赤死病」の使用について

包訳の表題『赤死病』及び本文にみられる「赤死病」の言葉は、本間訳には見られるものの、谷崎訳の該当する箇所では「赤き死」と訳されていて、「赤死病」の言葉は見られない。それでは、包訳の「赤死病」の言葉がある箇所は本間訳を重訳しているのだろうか。

本間訳では、「赤死病」の言葉は合計6回登場し、包訳では9回登場している。次の包訳と本間訳の対応表から詳しく見ていきたい。

<表2：包訳と本間訳の「赤死病」の対応表>

段落※	包 訳	本 間 訳
【1】	赤死病者，至可恐怖之悪疫也。	赤死病—が長い間わが國を荒廢した。
【2】	惟自此赤死病蔓延以來，大公領土中之住民，已罹此疫者半。	ある時殿下は、御領地内の住民がこの赤死病の爲めに次第に減少して、人口の半數ほどを失つたと聞いて、……

【3】	固不能再以赤死病三字，擾其懷抱也。	×
【11】	面藏面具之中，殊不審其作何狀，顧就其假面觀之，則儼爲一種赤死病之表現。	×
【12】	×	殿下のお傍侍った群臣どもは青くなつてゐた、この命令をきくと直ちにその <u>赤死病</u> の化物を捕へやうと追つた。
【13】 ₁	又於黒檀大自鳴鐘之後，捕此假面之男，則已奄奄一息，剝此赤死病之假面，而露此赤死病之真相。	其者は眞正の <u>赤死病者</u> であつた。
【13】 ₂	遂譁呼曰、『 <u>赤死病</u> 已襲入此間矣。 <u>赤死病</u> 已襲入此間矣。』	×
【13】 ₃	×	かくて <u>赤死病者</u> が此に現はれたといふ事は、今は承認せられたのである。
【13】 ₄	一時染 <u>赤死病</u> 而斃者，乃過半數。	闇黒と <u>赤死病</u> とは物凄くも領土全體を封じ籠めた。

（※段落は包訳を使用。）

＜表2：包訳と本間訳の「赤死病」の対応表＞において包訳と本間訳共に「赤死病」の言葉がある箇所では内容が異なる。例えば、包訳【2】「惟自此赤死病蔓延以來，大公領土中之住民，已罹此疫者半。」と本間訳「ある時殿下は、御領地内の住民がこの赤死病の爲めに次第に減少して、人口の半數ほどを失つたと聞いて、……」のように内容が異なっているのである。結果、包訳と本間訳では「赤死病」の言葉の共通点以外、共通する内容は見られなかった。即ち「赤死病」の言葉の対応箇所からは、包が本間訳を参照した可能性は低いことがわかる。

これに対し谷崎訳と包訳はどうであろうか。谷崎訳「赤き死」と包訳「赤死病」の対応箇所は、＜表2＞の【1】【3】【13】₄の3か所があり、それぞれ内容が異なった。つまり「赤死病」の言葉がある箇所では、包訳は本間訳、谷崎訳双方とも異なることがわかった。さらに包訳のみの箇所はポオ原作にもないことから、包による加筆及び誤訳と考えられる。

では「赤死病」の言葉はどこから来たのだろうか。本間訳を参照した可能性が低いならば、谷崎訳の「赤き死」「病」ということから着想を得たと考えられる。また本間訳の表題だけを見た可能性もあり、現時点では包訳にある「赤死病」の言葉を包が何から取ったのかについては判明できなかった。

5-4 本間訳、谷崎訳、包訳の比較箇所からの検証

本小節では本間訳、谷崎訳、包訳の内容を比較するにあたり、以下のように対照する箇所を分類して検証していく。＜表3＞にある〈1〉～〈3〉においては、内容的に他の二文献にない箇所を検討している。次に〈4〉～〈6〉においては、内容的に三文献のうち二文献にしかない

箇所である。ただしこの二箇所の内容が共通しているかは以下の検討課題である。〈7〉においては、三文献共に見られる箇所であるが、こちらも内容が共通しているかは検討課題である。本間訳、谷崎訳、包訳の内容を対応させると次のようになる。

＜表3：本間、谷崎、包の描写内容による対応表＞

	本間訳	谷崎訳	包訳	該当箇所
〈1〉	○	×	×	4箇所
〈2〉	×	○	×	3箇所
〈3〉	×	×	○	9箇所+1箇所※
〈4〉	○	○	×	13箇所
〈5〉	○	×	○	0箇所
〈6〉	×	○	○	11箇所
〈7〉	○	○	○	

(※包訳【14】は、『赤死病』に対する包天笑の批評のため+1箇所とした。)

本間訳、谷崎訳、包訳の該当箇所を検証する方法として、初めに表3の〈1〉～〈3〉本間訳、谷崎訳、包訳それぞれのみにある描写箇所をポオ原作の該当箇所と対照すること、以下の事項が判明した。

- 〈1〉 本間訳のみに見られる箇所は4箇所あり、いずれもポオ原作に該当する箇所はなく、本間による加筆である。
- 〈2〉 谷崎訳のみに見られる箇所は3箇所あり、いずれもポオ原作に該当箇所があった。包訳にこの箇所が見られなかったということは、包が削除したと考えるべきであろう。
- 〈3〉 包訳のみに見られる箇所は9箇所あり、いずれもポオ原作に該当する箇所はなく、包による加筆だと考える。

以上〈1〉～〈3〉の結果から、本間訳はポオ原作に忠実ではなく、谷崎訳はポオ原作に忠実であることの証明となった。そして包訳はポオ原作に忠実ではないことがわかった。加えて谷崎訳がポオ原作を忠実に訳している点から、谷崎訳にあって包訳になく、谷崎訳になくて包訳にあるということは、包訳は谷崎訳にも忠実ではないとの結果ともなった。

次に〈4〉～〈6〉は内容的に三文献のうち二文献にしかない箇所を示しており、以下の事項が判明した。

- 〈4〉 本間訳と谷崎訳のみに該当箇所があり、包訳にない場合については、13箇所見られた。この二文献の検証については本稿における包訳の調査と関わりがないので割愛する。

- 〈5〉 本間訳と包訳のみに該当箇所がある場合については見つからなかった。この点からも、包訳は本間訳を参照した可能性が低い結果となった。
- 〈6〉 谷崎訳と包訳のみに該当箇所がある場合について該当箇所は11箇所あり、以下にその対応表をあげる。

〈表 4 : 〈6〉 谷崎訳と包訳のみに該当する箇所の対応表〉

段落※	包 訳	谷 崎 訳
【1】	病者，身體現深紅色之斑點，此惡疫之侵襲，乃令人無從診視，無從看護。	患者の身體、殊に顔に現れる深紅色の斑點がその惡疫の兆候で、忽ち人々は看護も同情も爲なくなる。
【3】	彼將謂有此樂土，即世界之人悉遭滅絕初，亦無關渠事，我且樂我小天地之日月而已。	外の世界は如何とも勝手になれ、そんな事を悲しんだり考へたりするのは馬鹿げた事であつた。
【3】	固不能再以赤死病三字，擾其懷抱也。	無いものは唯「赤き死」だけであつた。
【4】	而外間之惡疫，方逞其暴威，到處披猖、當者盡靡，(略)	世間では惡疫が愈暴威を逞しうして居たが、(略)
【4】	均有門足以相通，一望可以全景在目也。	だから隅から隅迄全景が殆ど妨げられる事がない。
【5】	而亦嵌以青色之玻瓈。	それで窓も明らかに青であつた。
【6】 ₁	凡此皆大公爵波落士之奇想，而是日之假裝跳舞會，亦鬪奇矜異，各出心裁，以羣集邸中。	斯様にしてくらびやかな、奇想を凝らした装束をした群集が其處へ現れて來た。
【6】 ₂	而各人相顧其顏，均映出悲悽之狀，以是人無敢投足於是室也。	室内へ這入つて來る人々の顔を世にも物凄く映し出すので、思ひ切つて足を踏み入れる程の大膽な者は滅多になかつた。
【8】	大公爵能辨別色彩，知色彩與心理之關係，而調和之而刺激之。	公は色彩や意匠に對して立派な目利きであつて、唯一時の流行の裝飾等には目もくれなかつた。
【9】	此七室中，往來左右，羣焉環步其中，宛如夢幻中人，忽青忽黃，映室中之色彩，而紛迷眩惑。	七つの部屋を右往左往に夢見る如き群集は歩き廻つた。而して此等の夢幻中の人々は前後左右に振れ曲つて、室々の色を身に映し、(略)

(※包訳の段落構成を使用)

上記の対応表より、【3】【6】₁【7】の箇所には内容の違いが見られるが、他は多少の加筆は見られるもののほぼ谷崎訳に沿ったものとなっている。ただ、谷崎訳に沿っているということは、ポオ原作とほぼ同じであるということだが、段落構成よりポオ原作を参照した可能性は低いことから、谷崎訳からの重訳と考えてよいだろう。

次に 〈7〉 包訳、谷崎訳、本間訳の三文献共にある描写内容を比較する。ここでは特に注目

する一部をあげることにする。

<表5：包訳、谷崎訳、本間訳の描写内容の対応表（一部）>

【4】	包訳	「此寺院中，本極閑麗，……」
	谷崎訳	「其の舞踏會は實に浮き立つ様なきらびやかなものだつた。」
	本間訳	「さてこの假面舞踏會こそ最も淫慾的しいものであつたので、……」
【5】 ₁	包訳	「然而，大公爵波落士者，生性好奇，乃將此七室，悉改變其裝飾。」
	谷崎訳	「然し風變りな公の好みから察せられる様に、此處では様子が全く違つて居た。」
	本間訳	「然るに今この室の模様は全てさうでないで、戀のかほりは誰にでも思ひ合されるのであつた。」
【5】 ₂	包訳	「第二室爲紫色之玻瓈，而所有窗帘壁衣，亦均作紫色。第三室爲綠色玻瓈，則一例作綠色。第四室爲黃色，第五室爲白色，第六室爲粉紅色。」
	谷崎訳	「二番目の室は飾りつけの家具や掛毛氈が紫なので、窓硝子も紫だつた。三番目はすっかり緑で、窓硝子もやはりさうだつた。四番目は燈火も、飾りつけも、黄色で、五番目は白、六番目は董色だつた。」
	本間訳	「次の室の硝子は、器具壁絨の色をうつして曉の空美しき紫を色とし、第三の室のはオレンジ色、第五は雪と白う、第六は董をその色とうつした。」

(※包訳の段落構成を使用)

【4】【5】₁では本間訳は誤訳をしているが、包訳は誤訳しておらず谷崎訳とほぼ同じ内容となっている。【5】₂では本間訳は3部屋目の色を緑ではなくオレンジと誤訳し、かつ4部屋目の描写が抜けている。包訳と谷崎訳は共に3部屋目を緑色とし、また4部屋目の描写があり本間訳との相違がみられる。この他三文献が合致する箇所において、三文献共に描写が異なる箇所もあれば、三文献がほぼ同じ描写となる箇所もある。包訳が谷崎訳と異なる場合、本間訳とも内容が異なった。

5-3、5-4で包訳、谷崎訳、本間訳の本文を検証した結果、段落構成の検証と同じく包訳は本間訳を見た可能性は低い。即ち段落構成と本文からの検証から「赤死病」というフレーズを除いて、包訳は本間訳からの重訳ではないことが立証できたと考える。次小節では包訳と谷崎訳の本文検証をより具体的に行っていく。

5-5 包訳と谷崎訳

4節「段落構成の検証」と小節5-3、5-4から、包訳は本間訳を重訳した可能性は非常に低い結果となった。それでは、包訳は谷崎訳からの重訳なのであろうか。包訳と谷崎訳の対応表については、5-4の<表4：<6> 谷崎訳と包訳のみに該当する箇所の対応表>で二文献の対応箇所の一部をあげ、上述にて一部の例外はあるものの谷崎訳にほぼ沿っていると述べた。本小節では<表4>以外の包訳と谷崎訳の違いを具体的に見ていく。

包訳と谷崎訳を対応させると、谷崎訳を削除、誤訳、意識している箇所がみられる。まずは削除箇所からみると、包訳は第8段落以降から急に谷崎訳にある箇所の削除箇所が増える。それまで削除は見られたが、分量としては多くはない。削除箇所の例として、谷崎訳「先づ最初室の模様を云はうなら、……」⁽²⁸⁾ [谷崎1913、P5] や「而して前にも云つた通りの樂の音が止んで、……」⁽²⁹⁾ [谷崎1913、P13] の著者ポオの言葉の箇所が包訳では削除されている。その他の箇所を合わせると合計15箇所の削除が見られる。第8段落より前に見られる削除箇所は8箇所と削除箇所の半数にのぼるが、削除された行数は多くて1～2行ほどであった。しかし第8段落以降では、削除が数行に及ぶようになる。後半に急にこのような削除が行われたのはなぜだろうか。削除された箇所を見ると、仮装舞踏会における仮装者を描写した部分であったり、ワルツを踊っている描写であったりと、その箇所が抜けても大筋にあまり差しさわりのない箇所が削除されている。つまりこれを見る限りでは、包訳は谷崎訳をほぼ理解した上で、細かい描写部分を削除したと考えられる。なぜこのような削除が見られたのかについて今のところ明らかにすることはできなかった。

誤訳箇所には、語の誤訳・文の誤訳が見られる。語の誤訳には、「幫間⁽³⁰⁾（「たいこもち」とルビあり）」[谷崎1913、P4] の語を「侍従」[包1916、P2] とする箇所や、「ゴシック風」[谷崎1913、P6] を「羅馬時代」[包1916、P2] とする箇所などがある。ただし「幫間」の誤訳については、おそらく「幫」（助ける）の意味に引きずられたための間違いであると考えられる。

文の誤訳例には、「其れが如何にも不思議な調子と力を籠めて居て、一時間経つ毎にオーケストラの樂人達は彈奏の中にも思はず一寸の間手を止めて其の音を聞きすまさないでは居られなかつた。」[谷崎1913、P8] とする箇所を「乃成一不可思議之調子、每經一小時似有亞開司脫拉之樂工、作此彈奏也。」[包1916、P3] と時計の音がオーケストラのような演奏するなどの箇所がある。こうした語や文の誤訳箇所は全体としてそう多くなく数か所見られる程度である。

意識箇所においては、谷崎訳を簡潔にまとめたり、加筆したりと様々あるが全体的にはほぼ谷崎訳に沿っていると言えるだろう。

包訳と谷崎訳を検証した結果、削除や誤訳、意識箇所は多少見られるが、文の大半は共通していた。ただ谷崎訳がポオ原作を忠実に訳しているために、谷崎訳独自に見られる特色があまり見られず、その為に包訳では谷崎訳にしかない箇所を訳した部分を発見するには至らなかった。

6 おわりに

今回の検証によって、包天笑の翻訳小説『赤死病』がポオの“The Masque of the Red Death”からの翻訳であることがわかった。加えて段落構成の検証からポオ原作からの翻訳ではないこと、本文の検証からは、本間訳からの重訳でなく谷崎訳からの重訳の可能性を明らか

にした。更に本文の内容を調査することで、この可能性の高さを実証することができた。仮に未発見の邦訳の存在があったとしても、本稿の検証により谷崎訳を重訳した事実が変わりはない。

包訳の大半はポオ原作と谷崎訳に沿っていると言えるのだが、包訳の第13段落にて本筋を覆す大きな誤訳を行っている。第13段落にある仮面の人物を捕えるシーンにおいて、ポオは仮面の人物を赤死病とは述べていない。また谷崎訳も「……、何の是と云ふえたいの知れた物から出来上がつて居るものでもないの、……」[谷崎1913、P18]として仮面の人物が何かは明確にしていない。これに対して包訳は「剥此赤死病之假面、而露此赤死病之真相。」[包1916、P6]と赤死病が現れたとはっきり訳しているのである。また同段落にある時計の寿命が尽きるシーンにおいても、包訳では時計の音が聞こえるとしている。これらから見て、包天笑がポオの作品を受容しきれていないことが明らかである。

包訳の第14段落で、包は『赤死病』を批評して次のように述べている。「笑曰、『嗚呼大公爵、目光僅在此宮邸之小天地、而不知天不許汝耽此逸樂也。惡疫且然、而況人事。』(「笑曰く、『ああ、大侯爵の視線はわずかこの宮廷の小天地しかなく、天が彼にこの逸樂に耽るのを許さないことを知らなかったのである。伝染病もまたかくのとおりであり、ましてや人の世の事である。』」[拙訳])、ここから包天笑が原作を寓話的に捉えていることがわかる。“The Masque of the Red Death”はポオの傑作のひとつであり、この作品を解釈するにあたって様々な分析がなされている。ポオ作品の分析及び包天笑から見えるポオの受容については、今後の課題としていきたい。また今後の展開としては、1910年代の中国におけるポオ翻訳について包天笑以外の作家からも見ていく考えである。

〔注〕

- (1) 包天笑『釧影樓回憶錄』(大華出版社、1971年6月)、「外國文的放棄」P156～P160。
- (2) 図1～図3をご参照下さい。
- (3) 『春聲』(月刊、主編・姚鵷雛、文明書局、全六集、1916年2月～7月)。
- (4) 前掲注(1)。
- (5) 樽本照雄編『清末民初小説目録 第6版』(2014年3月)及び「清末民初小説目録 第6版の訂正」(2014年7月)を参考とした。<http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto/> (2014年9月時点)
- (6) 鄭志明「近現代中国的愛倫・坡小説漢訳史研究」(『宜春学院学報』第33卷第11期、2011年11月)。
- (7) 前掲注(6)、P122。
- (8) “The Mask of the Red Death. A Fantasy.”, Graham’s Magazine, May 1842.
- (9) “The Masque of the Red Death”, Broadway Journal, July 1845.
- (10) 司海力訳『“紅死病”的假面舞会』(『外国文学』第2期、北京外国語大学、1982年3月)。
- (11) 陶敏訳『紅死病的化装舞会』(『外国文学專刊』第1期、吉首大学学报、1983年)。

- (12) 陳良廷、徐汝椿訳『世界文学名著宝庫・青少版・紅死魔面具』（三秦出版社、2009年6月）。
- (13) 曹明倫訳『愛倫・坡暗黒故事全集（上冊）』（湖南文芸出版社、2013年1月）。
- (14) James A. Harrison ed. “The Complete Works of Edgar Allan Poe” Volume 4, ‘The Masque of the Red Death’, AMS Press Inc., 1965, 2nd ed. 1979, P319～320.
- (15) 井上晴彦『暗黒の世界―「赤死病の仮装舞踏会」研究―』（『福岡大学人文論叢』第8巻第1号、昭和51（1976）年6月）
- (16) 宮永孝『点描 ポーの日本伝来考』（『社會労働研究』、法政大学、1995年6月）。
- (17) 前掲注(16)、P20。
- (18) 前掲注(16)、P20。
- (19) 谷崎精二訳『赤き死の假面』（言誠社書店、大正9（1920）年6月）、「序」、P4。『世界文学全集 ポオ傑作集緋文字・其他』（新潮社、昭和4（1929）年1月）、「解説」、P7。
- (20) 本間訳の第6段落の途中「然るに……」が谷崎訳第8段落の先頭に対応する。
- (21) 谷崎訳の第4段落最後の文は、包訳の第3段落に含まれる。
- (22) 本間訳第11段落は、谷崎訳第18段落の途中「やがて間も無く……」から対応する。
- (23) ここでは段落の関係性によって、包訳が谷崎訳の翻訳であることを主張しているが、本来ならば翻訳に際して谷崎訳を包訳の定本とした可能性があることしか言えないと思われる。また、他の文献を参照した可能性までは否定しない。その可能性については内容面の検討で明らかになるであろう。
- (24) 「この殿様が伽藍に引きこもって五カ月目か六カ月目の終りころ、……」『ポオ小説全集3』、創元推理文庫、1974年6月、P122。同箇所の谷崎訳は「丁度此處へ隱匿してから五六ヶ月目の終り頃、……」とある。前掲注(14)、P251。
- (25) 「部屋部屋の配置がまことに不規則で、一時に一部屋以上を見渡すことはほとんどできなかった。」、『ポオ小説全集3』、創元推理文庫、1974年6月、P122。同箇所の谷崎訳は「室々は一度に殆ど唯一つしか眼に入らぬ程不規則に造らへてあつた。」とある。前掲注(14)、P251。
- (26) 『名著新譯』「赤死病の假面」文禄堂、明治40（1907）年、P3。
- (27) 前掲注(25)、P6。
- (28) 前掲注(14)、「But first let me tell of the rooms ……」、P251。
- (29) 前掲注(14)、「And then the music ceased, as I have told; ……」、P255。
- (30) ポオ原作では‘buffoon’（道化師）とあり、この語には侍従の意味は含まれていない。

【参考文献】

＜日本＞（五十音順）

井上晴彦「暗黒の世界―「赤死病の仮装舞踏会」研究―」（『福岡大学人文論叢』第8巻第1号、昭和51（1976）年6月）

田中西二郎・他訳『ポオ小説全集3』（創元推理文庫、1974年6月）

谷崎精二訳『赤き死の仮面』(『赤き死の仮面』、泰平館書店、大正2 (1913) 年7月)

谷崎精二訳『赤き死の仮面』(『赤き死の仮面』、言誠社書店、大正9 (1920) 年6月)

谷崎精二、福原麟太郎訳『世界文学全集 ポオ傑作集緋文字・其他』(新潮社、昭和4 (1929) 年1月)

樽本照雄編『清末民初小説目録 第6版』(2014年3月)、『清末民初小説目録 第6版の訂正』(2014年7月) <http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto/>

中村俊昭、石田正伸、古宮照雄「J・P・ロッポロ「意味と『赤死病の仮面』」の翻訳」(『木更津工業高等専門学校紀要』第41号、2008年1月)

本間久四郎訳『赤死病の仮面』(『名著新譯』、文禄堂、明治40 (1907) 年11月)

宮永孝「点描 ポーの日本伝来考」(『社会労働研究』第42号、法政大学、1995年6月)

八木敏雄訳『黄金中・アッシャー家の崩壊 他9篇』(岩波書店、2006年4月)

<中国> (ピンイン順)

包天笑『鉤影樓回憶錄』(大華出版社、1971年6月)

鄭志明「近現代中国的愛倫・坡小説漢訳史研究」(『宜春学院学報』第33卷第11期、2011年11月)

<英文>

Poe, Edgar Allan: "The Mask of the Red Death. A Fantasy.", Graham's Magazine, May 1842.

Poe, Edgar Allan: "The Masque of the Red Death", Broadway Journal, July 1845.

Harrison, James A. ed.: "The Complete Works of Edgar Allan Poe", Volume 4, AMS Press Inc., 1965, 2nd ed., 1979. T.Y. Crowell, co. 1902. のリプリント。

Roppolo, Joseph: "Meaning and 'The Masque of the Red Death'", Tulane Studies in English, 13: 59-69, 1963.

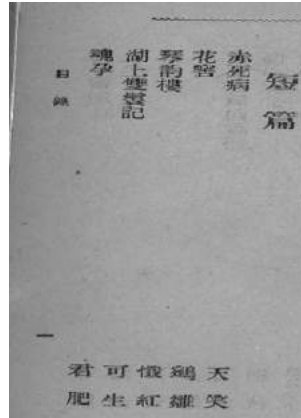
(しらす るみ 文学研究科中国文学専攻博士後期課程)

(指導教員：李 冬木 教授)

2014年9月30日受理



〔図1〕『春聲』第三集、表紙



〔図2〕『春聲』第三集、目録（一部）

赤死病

吳門天笑生譯

赤死病者。至可恐怖之惡疫也。患此病者。顔色深絳。狀如蠶血。先感劇烈之苦痛。頭腦暈眩。未幾毛孔中皆出血。而死病者。身體現深紅色之斑點。此惡疫之侵襲。乃令人無從診視。無從看護。蓋自起病。以至終局。爲時僅半小時耳。時與國全境均染此症。蔓延甚廣。一時幾無由撲滅也。

有大公爵波落士者。勇敢強健。於國中頗有勢力。惟自此赤死病蔓延以來。大公領土中之住民。已罹此疫者半。大公爵乃於其宮中。選此紳士貴婦人之身體壯健者。幾及千人。攜之以避居於一大寺院中。此大寺院者。構造闊壯。氣象巍峨。而公又加以莊嚴絢麗之趣味也。四周圍以高壁。下設鐵門。乃自大公一行。人入此院後。運以鎔鐵爐。與極大之鐵鏈。將此鐵門封塞之。自此以後。既無出入之道。亦使人堅其決心。無復有他願也。

但此院中種種之設備。俱極完全。而第一。卽此食物。大足供數年之需。彼將謂有此樂。

赤死病

〔図3〕 吳門天笑生訳、『赤死病』